【3】大師執筆法

写1巻

〔書名よみ〕だいししゅひつほう／しっぴつほう
〔著編者〕伝空海　〔写刊年次〕享保十三年（一七二八）

〔外題〕大師執筆法
〔内題〕㋐執筆法　㋑使筆法
〔その他〕なし

〔残欠状況〕全　〔保存状況〕小破　〔装訂〕巻子本　〔表紙〕紺色無地、（八双）有、竹（巻緒）有、平打　〔軸〕印可軸　〔表紙寸法〕縦二九・九×横二二・七糎　〔紙数〕一一紙　〔本文用字〕漢字
〔界線〕ナシ　〔法量〕縦二九・九×横四一七・一糎　①四一・八、②四一・三、③三九・三、④四一・一、⑤四〇・二、⑥四〇・四、⑦三九・四、⑧三九・五、⑨四一・二、⑩四二・〇、⑪一〇・九糎　〔料紙〕楮紙（杉原）
〔書入〕注記（朱・墨）　〔訓点〕有、返点・送仮名・合符・傍訓（朱）
〔印記〕ナシ　〔表紙見返〕斐紙（泥間似合・雲母引）　〔備考〕裏打修理済。巻頭に「松橋経蔵」と墨書がある。題箋は剥離。題箋の外題下に「智之箱ニ入」とあり。

〔奥書〕
享保十三年申年九月写校了　空海和上御筆云々
金剛峯寺
沙門真源

〔解題〕
弘法大師空海は名筆家で、日本書道の祖とされる。その空海の「執筆法」と「使筆法」を挿絵を用いつつ解説した書である。

空海は道真・道風と並ぶ三聖の一人であり、嵯峨天皇・橘逸勢と並ぶ三筆の一人でもある。また書聖と仰がれ、様々な奇瑞が伝えられてきた。

本書は、江戸時代になって弘法大師の説として作られたもので、空海の執筆法や使筆法を記す。「執筆法」では筆の持ち方を図示し、指の使い方を解説する。また「使筆法」では、点、ハネなどの運筆を十二種挙げて具体的に記している。これらの十二点は、大師流の基本として尊ばれたものである。

また空海の執筆法を伝える書として、様々な書物が著された。楠見敏雄氏によれば、弘法大師の書、大師流の資料には、以下のものが挙げられる。

1、弘法大師真跡執筆使筆法　一巻
2、空海執筆法　一冊
3、弘法大師真跡執筆法　一巻
4、弘法大師真跡執筆使用法　一冊
5、高野大師在唐伝来執筆法　一冊
6、高野大師在唐伝来執筆法　一冊
7、高野大師真跡書訣　一冊
8、大師流書契筆正伝　三冊
9、弘法大師十二点　一冊
10、十二点の大事　一冊
11、書法十二点　一冊
12、弘法大師御製八十一点　一枚
13、弘法大師筆道点画許之書　一冊

円覚寺本の奥書には、享保十三年（一七二八）九月、空海和尚の御筆を金剛峯寺（高野山）の沙門真源が写したものとある。真源については

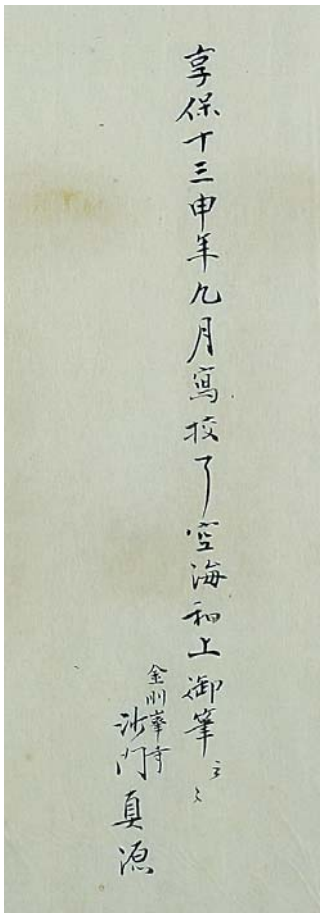
詳しいことがわからないが、空海の執筆法を伝える書の中でも、円覚寺本は、年代もわかる、大変重要な伝本であると考えられる。書写した場所については金剛峯寺（高野山）なのかどうか不詳である。また写した本についても不明である。

活字は、『弘法大師全集』三に所載する。比較すると、円覚寺本は、執筆法の次に使筆法があり、トメ、ハネ、などの解説の後、筆の挿絵と解説があるが、『弘法大師全集』では、使筆法の次に筆の挿絵と解説、そのあとに使筆法としてトメ・ハネの解説がなされている。筆の絵と解説の位置が大きく異なっている。7の寛政二年刊、屋代弘賢の『高野大師真跡書訣』は、「執筆法」と「使筆法」の解説をしたものだが、筆の絵と解説の部分については言及がない。

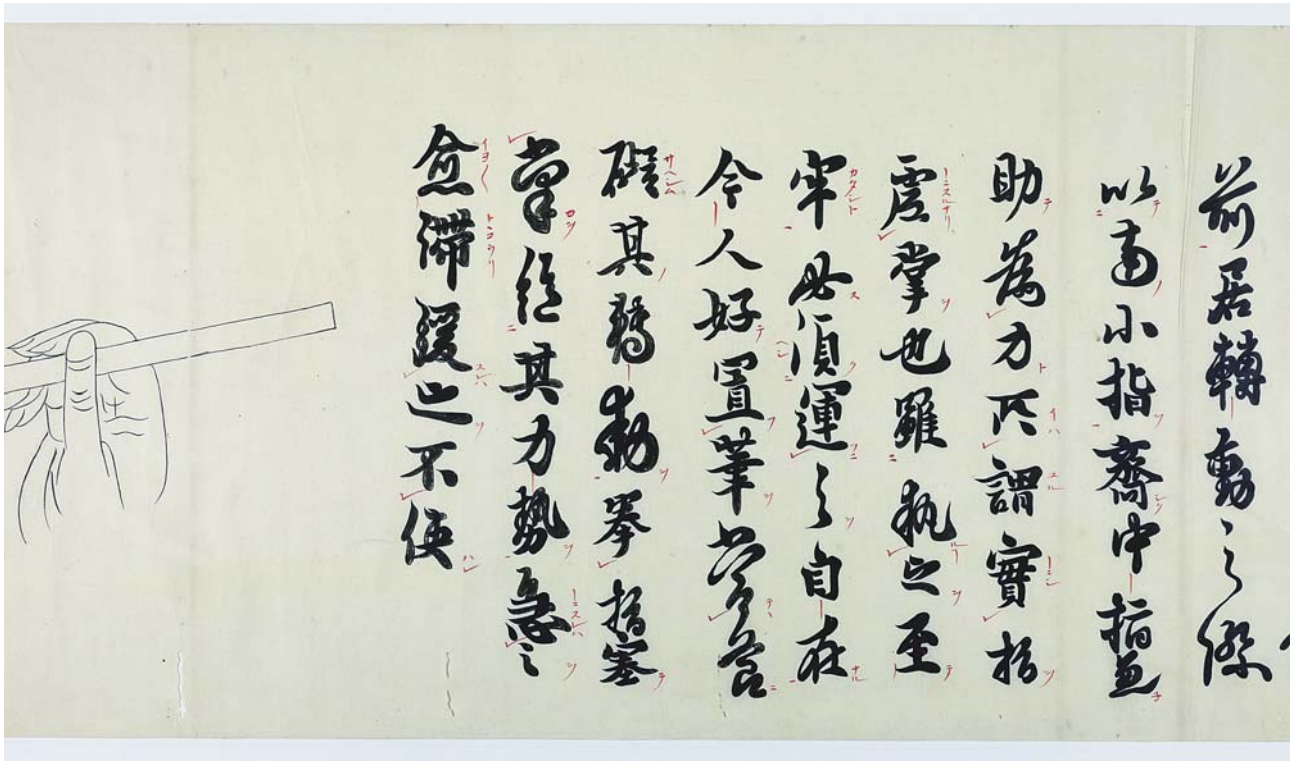
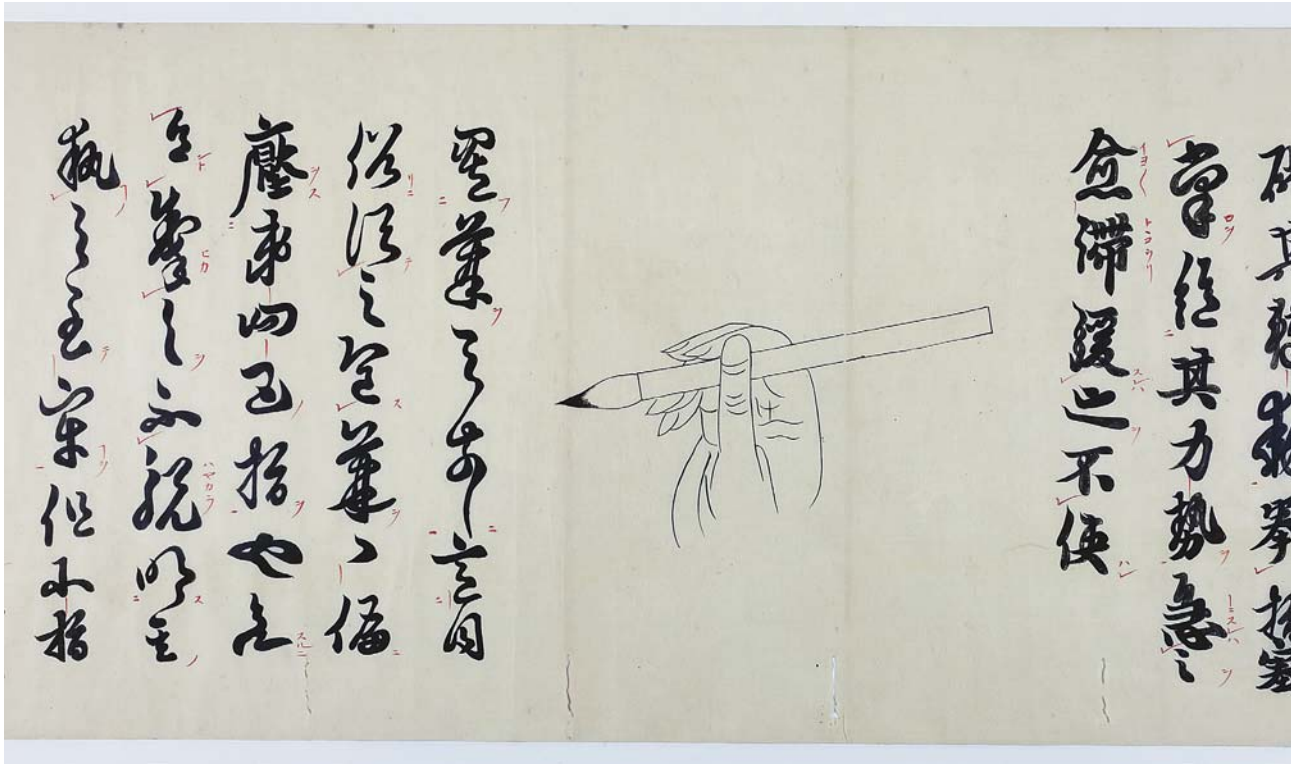
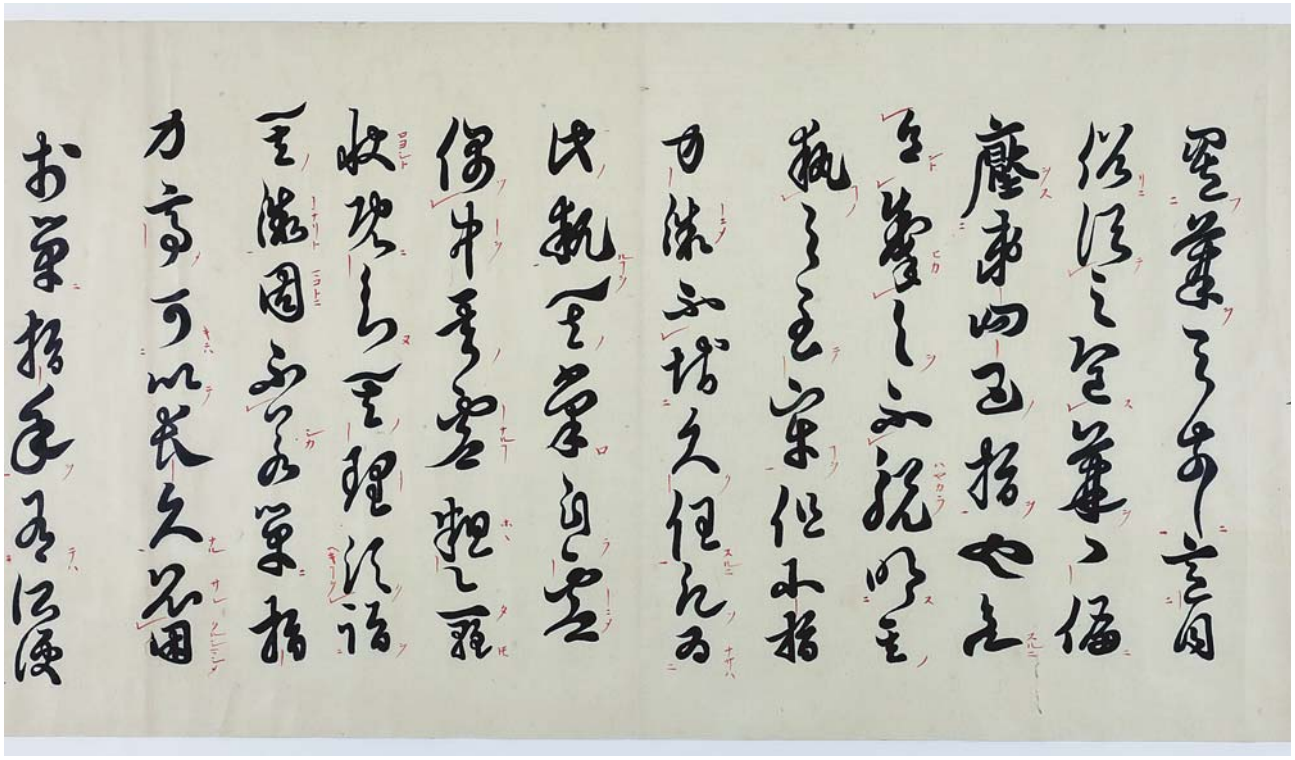
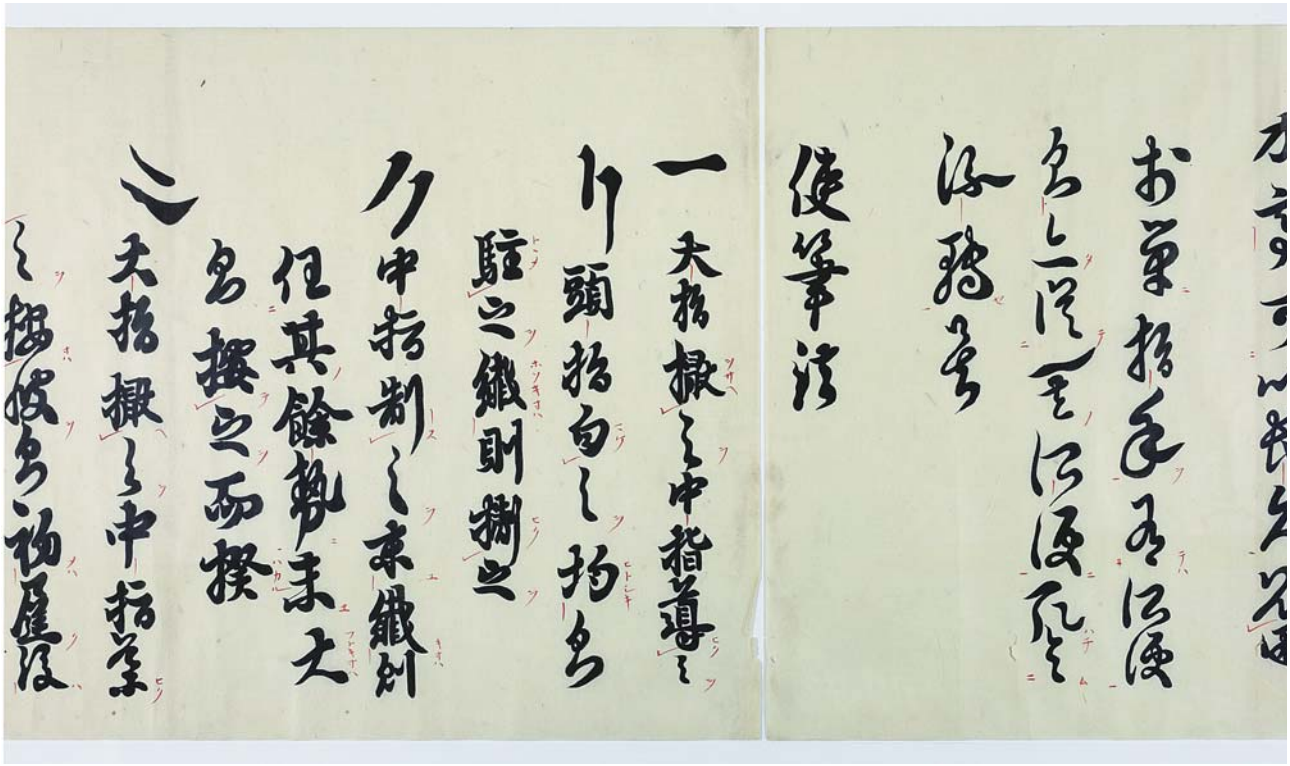
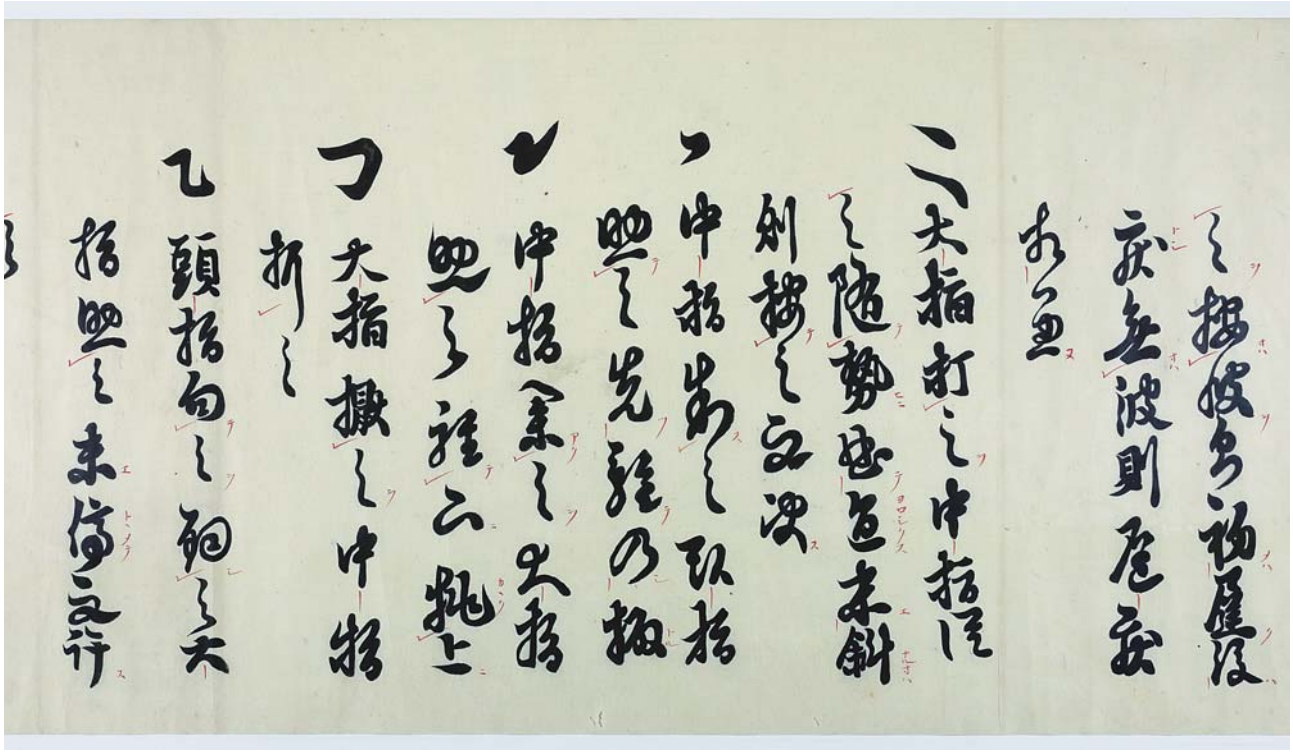
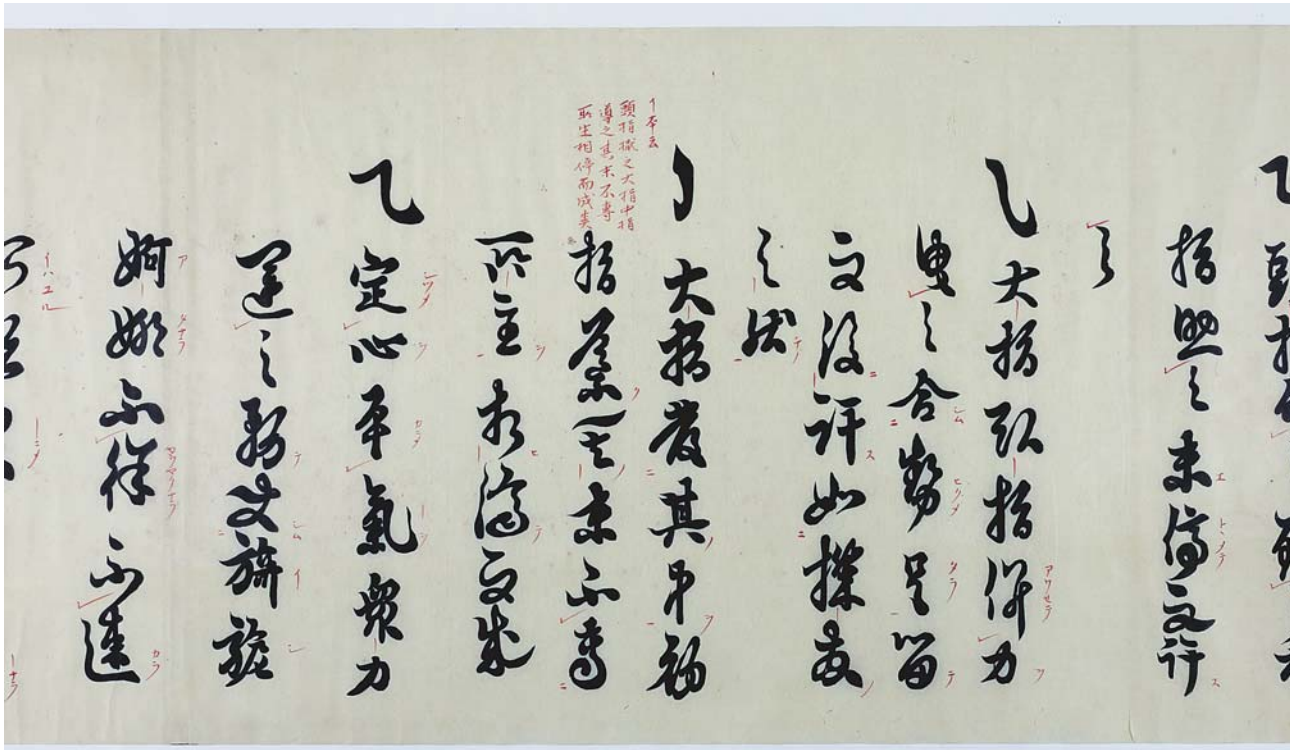
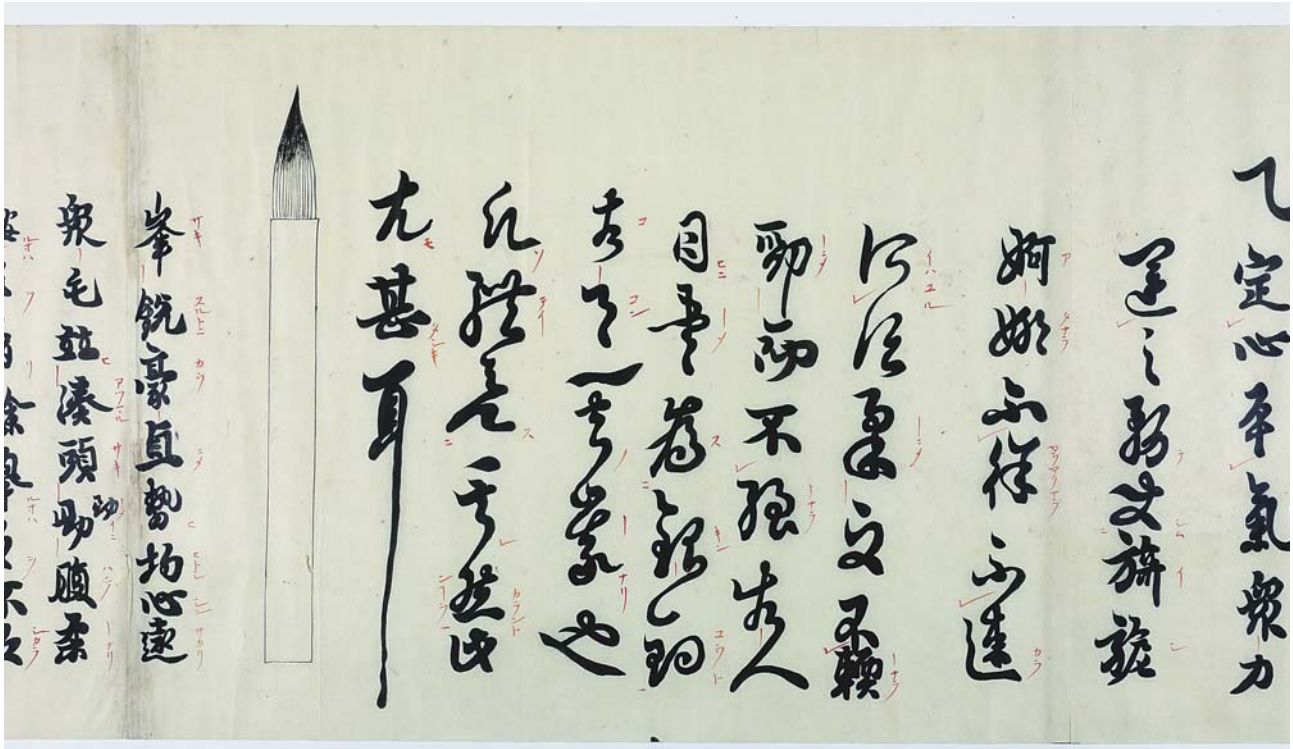
円覚寺本は、高野山で書写された奥書を持つという点に加えて、第一紙の冒頭に「松橋経蔵」と墨書がある点も重要である。松橋経蔵の所蔵する経緯も、また円覚寺への来歴も未詳である、今後の課題としたい。

〔参考〕
・源弘賢集註『執筆使筆法釈文』（擁萬閣　山口屋　森江佐七　刊）
・小松茂美『日本書流全史』（講談社、一九七〇年）
・楠見敏雄「弘法大師の書流―大師流について―」（『密教文化』一四九、一九八五年）

（渡辺　麻里子）



執筆法
置筆於大指中節
前屈轉動之係
以面小指齋中指並
助為力爪謂實指
松橋經蔵


前屈轉動之係
以面小指齋中指並
助為力爪謂實指
虛掌也雖執之至
牢必須運之自在
令人好置筆處者
礙其動拳指塞
掌徒其力勢急
急滯緩之不便